



本文抜

《 23歳で童貞喪失した鬼龍院／金爆の功罪／ヴィジュアル系は世界観と演奏スキル／ヴィジュアル系シーンが昔ほど盛り上がらない理由／金爆はセックスピストルズ／バンドシーンの求心力の喪失／タブーを根こそぎとっばらう／10代にうける初音ミク／／過去の文脈と切り離される必要性／新しい世代のバンド／／ 》

神聖かまってちゃんとゴールデンボンバー

———ロックンロールを受け継ぐバンドとは

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、映画「風立ちぬ」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

# 神聖かまってちゃんとゴールデンボンバー

ヴィジュアル系がロックンロールだったわけ

——ロックンロールを受け継ぐための方法

僕二三歳で童貞を捨てたんですけど

『ゴールデンボンバー』の鬼龍院翔がロッキングオンジャパンの二〇一三年 二月号のインタビューで脈絡がなしにいきなり云った言葉である。

彼らの概要をざっと紹介しよう。二〇〇四年にボーカル鬼龍院翔とギター喜矢武豊を中心に結成。二〇〇九年に今の四人になる。メンバーは基本的に演奏をしない。ドラムを発泡スチロールの棒で叩いたり、ベースに弦が二本しか貼られていなかったり、ギターソロでは、毛髪に墨汁をつけて書初めをしたり、熱湯風呂に入浴、スイカやカキ氷の早食いなどを行なったりする。自身のバンドを「笑撃のライブパフォーマンスと、奇才・鬼龍院翔の創り出すクオリティーの高い楽曲で注目の究極のエアーバンド」と評している。

彼らは多くのタブーに触れている。

↓

彼らは多くのタブーに触れている。

例えば、演奏をしない。

バンドのアイデンティティである楽器の演奏を行わないのだ。

さらに、彼らはヴィジュアル系だ。ヴィジュアル系のアイデンティティといえば化粧と世界観と高い演奏技術がある。これは『X JAPAN』のYOSHIKIが世の中に強烈に提示したイメージだ(『LUNA SEA』の登場によってそれは強固なものとなる)。



ヴィジュアル系にとって演奏スキルが



ヴィジュアル系にとって演奏スキルが重要とされるようになったのは、誰も頼んでないのに誰よりも速く叩き、誰よりも速く弾く『X JAPAN』のスタイルが大きな要因だ。

ヴィジュアル系界限にとって、高い演奏スキルはまず絶対的なものだ。それをクリアしないと同じ土俵に立つことを許されない。

体育会系のようにみえることから、しばしば「ヤンキー的」ともいわれる。（ちなみに、それが「文化系」のロッキングオン界限とケンカする原因でもある）

演奏しないゴールデンボンバーは↓

演奏しないゴールデンボンバーはロックバンドはもとより、居場所であるはずのヴィジュアル系のタブーを破った。

ヴィジュアル系のもつ世界観も彼らは↓

ヴィジュアル系のもつ世界観も彼らは打ち壊した。

クラシカルでゴシックがヴィジュアル系の世界観の根幹だ。それによって良くも悪くもファンの敷居が高く設定され、独自の世界観が守られていた。

ゴールデンボンバーはコミカルさを持ち込んだ。↓

ゴールデンボンバーはコミカルさを持ち込んだ。寸劇をしたり、熱湯風呂に入ったりする。

クラシックでゴシックという世界観の真逆を行った。



親しみやすさを生んだのだ。↓

クラシックでゴシックという世界観の真逆を行った。親しみやすさを生んだのだ。

それ以前には、ヴィジュアル系の『ナイトメア』が『仙台貨物』という別名を使ってコミカルさを打ち出して活動していたが、彼らは衣装や化粧を使い分けていたし、『仙台貨物』のときは自身をヴィジュアル系バンドとはちがうと位置づけていた。別バンドとしないと、はみ出る行動ができないくらいヴィジュアル系は世界観を守ることを強いられているのだ。

ゴールデンボンバーはヴィジュアル系バンドという立ち位置のままコミカルさを出したので、ナイトメアのそれとは違う。

彼らはヴィジュアル系特有の世界観を壊す代償としてその批難をすべて背負い込むのだ。



ゴールデンボンバーは「あんなのバンドじゃない」と俗にロックリスナーから言われる。↓

ゴールデンボンバーは「あんなのバンドじゃない」と俗にロックリスナーから言われる。わたしは、彼らこそロックンロールだと思う。

演奏していないことが批難の原因であると思う。「Dance My Generation」という曲では、TV出演で曲を披露するとき、楽器すらもはや最初から用意していなかった。



パンクの代名詞『セックスピストルズ』↓

パンクの代名詞『セックスピストルズ』というジョニーロットンボーカルとするバンドが一九七〇年代にいた。ピストルズに途中から加入したシド・ヴィシャスはそれまでベースを触ったことがなかったという。

世界中で大ヒットした彼らのレコードのベース音源は、初代ベーシストのグレンが弾いているといわれている。ライブでは、シドの弾くベースはアンプから音が出ていなかったという話がある（客を殴って血だらけにするから弾いてない印象が強いのではないかと想うのだが）。彼らに関してはウソかホントか分からない逸話が多い。

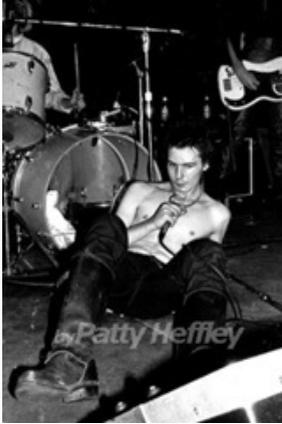
しかし、ピストルズといえば、ジョニーロットンの他に、楽器演奏の印象が低いシドのイメージが強い。シドの存在感はいまも伝説的に語り継がれている。当時のリスナーはシドの上手い演奏を聴きにきていたのかと想像してみると、

きっとちがうだろう。

↓

当時のリスナーはシドの上手い演奏を聴きにきていたのかと想像してみると、きっとちがうだろう。シドを見たかったし、その場で曲が鳴らされていることを体感したかったのだ。

つまり、リスナーにとって彼が楽器演奏してるとかしてないとかどうでもいいのだ。ピストルズは「楽器演奏してない？そんなことどうでもいいだろ。良けりゃいいだろ」ということを教えてくれる。



このエピソードから見ると「演奏してないからロックじゃない」という論はなりたたない。そもそも、ロックンロールはそんなことを許さないほどケツの穴の小さいものではない。

彼らがロックシーンにもたらしたものはなんなのか。↓

彼らがロックシーンにもたらしたものはなんなのか。

ヴィジュアル系シーンが昔ほど大きく盛り上がらないのは後続のヴィジュアル系たちがその特有の世界観の枠を広げようとしなかったからだろう。そもそも、ヴィジュアル系と呼ばれた『X JAPAN』も『LUNA SEA』もヴィジュアル系を目指したのではなく、どのバンドにもなりたくなくて、大胆な化粧と世界観になった。



しかし、いまのヴィジュアル系バンドはヴィジュアル系になろうとしている。枠のなかに入ろうとしていた。それは偉大なバンドたちの「意志」を受け継いでいるようにみえて、外見を踏襲（とうしゅう）しているだけだ。まったく筋ちがいのことをしている。

その枠の中にいる限り、『X JAPAN』や『LUNA SEA』に↓

外見を踏襲（とうしゅう）しているだけだ。筋ちがいのことをしている。

その枠の中にある限り、ぜったいに『X JAPAN』や『LUNA SEA』に勝つことはできない。  
それら偉大なバンドが作った枠を壊すことこそ彼らの「意志」を受け継ぐことになるのだ。



〇〇年代中期から、ロッキングオン界隈のロックシーンも、↓

〇〇年代中期から、ロックオン界隈のロックシーンも、ヴィジュアル系シーンも  
いろんなブレイクはあったにしろ、メジャーシーンではいまひとつ盛り上がり  
に欠けた。

それは、日本のロックバンドの歴史が九〇年代と〇〇年代初めにある程度積み上  
りきったからだと思われる。ロックバンドの商業化（は大昔から言われているが）の果  
ての先鋭化による停滞によるものだ。歴代のロックバンドたちが作った枠は強固なも  
のとなり、後続者たちはその枠の中でやっても歴代のバンドには圧倒的に勝てない（名声  
的にもお金的にも）ので、そこから少しはみ出そうとすれば新しいバンドはさらに難解  
なものになるしかない。

そうなると、バンドシーンは若者の求心力を失っていく↓

そうすると、バンドシーンは若者の求心力を失っていく。昔からそれはある程度あったが、現代はネットで検索をかければいくらでも偉大なバンドと曲とライブ風景を観ることが出来る時代だから、若者はちよこざい新しいバンドを聴くよりも、エネルギー溢れる大胆な過去のバンドを聴くようになる。

先鋭化によって難解になった現代のバンドはマニアックさやリテラシーをもつリスナーにはウケ↓

先鋭化によって難解になった現代のバンドはマニアックさやリテラシーをもつリスナーにはウケるが、ロックに初めて触れる新規・初心者にとって参入できないものになる。

次第に、ロックはその文脈を知らなければ楽しめない難しいものになっていった。

だから、初音ミクに代表されるボーカロイドが一〇代の少年少女を中心にウケたのだろう。ボーカロイドなら難解になったロックの文脈を知らなくても聴けるからだ。若者は「自分たちの音楽がやっと現れた」と思ったはずだ。

バンドの文脈でもヴィジュアル系の文脈でも↓

バンドの文脈でもヴィジュアル系の文脈でもない、過去の文脈と切り離された新しい世代のバンドが必要だった。

それがゴールデンボンバーだ。

彼らの出現とヒットによって明らかになったのは、最近のロックバンドがいかに偉そうにふんぞりかえっていたかということである。売れることは意識しても、リスナーのことを意識していなかったのだ。

売れることは意識しても、リスナーのことを意識していなかったのだ。

バンドは曲にかまけてリスナーに寄りそっていなかったということだ。↓

売れることは意識しても、リスナーのことを意識していなかったのだ。

わざわざ、「ステージ（上）もフロア（下）ないぜ、同じだぜ！踊れ！」と口で言っておきながら、バンドは曲にかまけてリスナーに寄りそっていなかったということだ。

わざわざ口に出さず、ステージ（上）からフロア（下）に向かって身体の限りを使ってリスナーを笑わそうとしているゴールデンボンバーの方が、ずいぶん正直である。「上にいるけど、その代わりどんなことをしても笑わせるからな」という意気込みを感じるからだ。



神聖かまってちゃんも過去のロックの文脈を必要としない。↓



神聖かまってちゃんも過去のロックの文脈を必要としない。リスナーに寄りそえる新しい世代のバンドだ。彼らは当時珍しかったネット生配信によって、自らをリスナーと近いものにしていった。

バンド練習の風景や笑わせる気満々のイカダ配信（monoの驚異的なビート板泳法）、車移動やライブの様子まで中継する。彼らには親しみやすさがあった。



さらに、作った楽曲をフルでネットにアップし↓

作った楽曲をフルでネットにアップし、リスナーが自由に聴けるようにしていた。ネットに楽曲をアップすることはあっても始めの一分や一分半しか曲を聴かせないのが当時のロックシーンの常識だったので、それを考えると彼らのやっていたことがいかに驚異的だったか分かるだろうか。

タブーを根こそぎとっばらったのだ。リスナーがなにを求めているかを分かっていたのである。

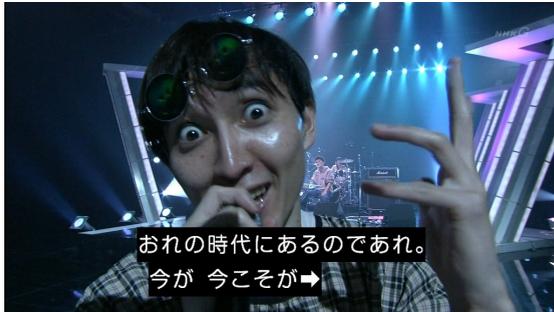


彼らは難解になって死にかけているロックシーンを破壊した。↓

彼らは難解になって死にかけているロックシーンを破壊した。

内部から強烈な批判を浴びるそれは、自ら火中の栗を拾うようなものだ。しかし、それをやってきたのが、歴代に名を残すロックンロールバンドたちだ。彼らも敷居の高くなっていたロックシーンから、ロックを少年少女の手に取り戻そうとした。

神聖かまってちゃんは偉大なバンドたちの「意志」を正しく受け継いでいる。←



うおお

神聖かまってちゃんとゴールデンボンバー ーーーロックンロールを受け継ぐ  
バンドとは

<http://p.booklog.jp/book/85244>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社ブックログ